受けつがれてきたもの よき祖先になるための

≪ブッダ・ダルマ覚え書≫

ロシアがウクライナへ 武力侵攻した年 二〇二二年九月二十日

石上智康（いわがみ ちこう）

浄土真宗本願寺派総長。一九三六年東京生まれ、東京大学印度哲学科修士課程修了。龍谷大学の理事長も務める。財団法人全日本仏教会理事長、日本宗教連盟理事、文化庁宗教法人審議会委員などを歴任。最新著作は『増補版 生きて死ぬ力』（中央公論新社）。

みな 関係しあい 縁(よ)って 起きている

太陽の光
大気 海 そして 大地
草木が 生い茂り
鳥や 蝶が 舞う

天と 地と 水と
その つながりの中で 人も 生きている

受けつがれてきた いのち
父がいて 母がいて 生をうけ 育まれ
はかり知れない つながり 関係の中
原因や 条件に よって
今 ここにいる

すべてのこと すべてのものは
原因や さまざまな条件 縁(えん)が 互いに関係しあい

生起している 縁(よ)って起きている 「縁起(えんぎ)」している
独立自存のもの ではない

なにごとも 縁起している世界 の中で
みな 縁起しているいのちを 生きている
いのち 在(あ)らしめられている

［諸々のものが何かを］縁として生起すること（縁起）を
我々は［諸々のものが］空であること（空性）と言う（中略）
［何かを］縁とせずに生起するものは 何ら存在しない
したがって 空でないものは 何ら存在しない（『根本中頌』桂紹隆訳）

人間の思考による 善し悪しなどが 入りこむ余地は ない

すべての現象が 縁起していることを「空」であるという
何かを縁としないで 生起するものは 何も存在しない
空でないものは 何もない

だから 固定した実体 すがた かたちなど 何もない
人間の思考による 執われが
良し悪しや 喜び悲しみなどが まぎれ込む 余地はない
得るものがない 失うものもない

「……カッチャーヤナよ『あらゆるものは 有である』というなら これは一つの極端な説である『あらゆるものは 無である』というなら これは第二の 極端な説である
如来（ブッダ）は これら両極端に 近づかないで 中道によって
法を説くのである」（サンユッタ・ニカーヤ カッチャーヤナ・ゴッタ経 五島清隆訳）
真実は 有と無の 二つの極端を 離れている 中道である
私のものとしての 譲ることのできない権利 などという思考が 入る余地は ない

縁起している事実の ほかに 固定した実体 すがた かたちは 何もない
縁起している事実を さまたげる 執われや悪など 何もない

この宇宙 生きとし生けるもの 森羅万象
みな 縁起 空

このことわりの中に在る

「この諸法いろいろのものは
空を特質としています
すなわち現象世界においては
いろいろな力が加わって
生じたり滅びたりしているのですが
高い境地から見ると
ただ偉大なる一つのことわりがあるだけで生じても滅しても いません
ただ偉大なる真実がそこにあるだけです」（中村元）

分別が はたらき出す 以前の 在(あ)るがままの そのまま

縁起 空である
私が こちらにいて 自と他に二分する
対象的思考が はたらき出す 以前の
在るがままの そのまま 無分別智の世界
一切の相対的 固定的なわくの 取り払われた 真に絶対 無限定な真理の世界

すべてが 一つになっていて 寸分の対立もなく 障りなし
広く 大きく 限りない

日常一般の 認識作用から 科学的思考に いたるまで
対象的思考でないものは ない
頭脳的な思考であるから 世俗的には 分別といっても いい
全人格的思考は 頭も心も体までも 全体が一つになって いとなむ思惟
身心全体が 一つになっているから 全人格的思考と いえる
考える自分と 考えられる自分とが 一つになっている だけでなく
考える自分と 全世界 全宇宙とが 一つになっている

主観と客観とが未分の 対象的思考も執われも いっさい混在しない
在るがままのそのままが 本来のまま 顕(あら)わになっている
それは ここ それは いま
「この生死は すなわち 仏の御いのちなり」(道元禅師)
生と死も ともに空であるから 区別されず 分かつことのできない 不二(ふに)のもの
真実は ここ それは いま

修行をつみ この世の実相 真実 ダルマを 覚った人が ブッダ
誰でも ブッダになる ことができる
ブッダは この世界の 創造主ではない

ダルマが 分別の領域を超え ブッダの全人格に 顕わになる
ブッダによる 全人格的思考に よって
禅定に専念することに よって 覚醒された ダルマ
すべての存在に 通底する 真実
究極の境地であり 実践を基礎づけるもの
倫理的価値を成立させる 真の基底

ブッダが ご覧になれば
ブッダ・ダルマから 観れば
ただ 空なる真実が あるだけ

Not Buddhism but Buddha Dharma
ダルマは 対象的思考を超えた 在るがままの そのまま
分別知による 主義や主張などではないから 良し悪しの領域を 超えている

すべての現象は 縁起 空である と気付かされ
一切の束縛から 解き放たれて 自由になる 安楽になる
「あらゆる束縛の絆を のがれた人には 悩みは 存在しない」（ダンマパダ 中村 元訳）

だから ダルマを 依りどころとして 生きていく
この地上が より良き社会に なるために
愚者のままこのままで 死ぬことができる ようになるために
欠くことの できないもの

ある公園の 片隅で 不思議な ことが ……

ある公園の 片隅に 地面から 真っ直ぐに立ち
直角に曲って また 上へのびている 藤の古木
子供たちが その枝に乗り 全身で 大きく揺すっている
歓声を あげながら

枝も 藤棚も 大きく揺れるのが 面白いらしく

いよいよ 力いっぱい 揺すっている

「ヤメナサイ」と 叫ぼうとした 瞬間
彼らの重み と 揺さぶりに 耐えかね
藤棚の支柱が 折れ
棚全体も 崩れ落ちた

子供たちは 狼狽し 蛇の前の 蛙のよう
ところが その時
不思議な ことが
崩れ落ちていく すがたに うながされるまま
ある 直観(ちょっかん)が ……

(なるほど これが変化 ということか)

と 同時 瞬時に
身も 心も 頭も 私という 構えも
今までの自分が 何もかも すっぽり 抜け 落ちていく

崩れ落ちる ありさまが みるみる広がり
藤棚も 私も 私の足元も 周囲も
すべてが 一つになって いて
自分と 自分以外のものとの 対立も なく
活き活きと 満ち満ちて いて
何の 障りも ない

日常の 対象化し 執われてしまう 認識作用が
良し悪しなどが はたらき出す 以前の
在るがままの そのままが
本来のまま 顕わになって いる

かつて 経験したことの ない 感動で
ただ 立ち尽くす ばかり
言葉に ならない 言葉を 超えている

観念した子供たちは 身構えていたに 違いない
しかし 叱ろう などという気持ちは 少しも 起こらず

寛大になれている という自己満足の思いも なく
ただ 手付かずのまま 妙なる全体が ある ばかり

暫くして 工夫をこらし
藤棚は 修理された

「こと・ものすべて 無常なり と智慧もて 見とおすときにこそ
実に 苦を 遠く離れたり これ清浄にいたる道なり」（ダンマパダ　三枝充悳訳）
清浄とは 執われのない 完全に清らかな境地
清浄にいたる道とは 覚りにいたる道 のこと

空なる真実が よりどころ 自他の平安を 目指し 生きていく

縁起し 変化している 空の世界に 在りながら
どうしても「わがまま我」出て 執われる

自分のものは 無くしたくない もっと欲しい
失敗すれば 落ちこんで

憎い かわいい
好きだ きらいだ
喜び 腹をたて
病気になる 老いるのは イヤ
死にたく ない

思いどおりに 生きていきたい と
「わがまま我（が）」出る
われら 凡愚の者

「行為の主体と その行為との二つは ともに空である
空であるから それらを 求めても〈不可得（ふかとく）〉である
この〈不可得〉という道理こそ ブッダたちの よりどころ」（華厳経）
縁起 空ゆえに 求めても得られるものは ない
この不可得 という道理こそ ブッダたちの
そして 人間の生きる よりどころ

「自らを よりどころとし 法（ダンマ）を よりどころとし

他のものを よりどころとせずにあれ」（マハーパリニッバーナ経　中村 元訳）

この世の縁が つきるまで 大切に生きていく
清らかな心のない 我利我執の 身であろうとも
縁起 空という 真実の中に 在るのだから
少しでも ブッダの真似ごとを させていただく
在るがままの そのままの真実に 教え導かれ
そのように 日々に 努力精進する

精いっぱい努力し その時どきの すがたに
執われ ない
逆らわ ない
得意にならない 驕らない
愚痴らない

自分のものに対して「私のもの」という思いを 捨て
執われのない心で 他人（ひと）に与え
他人のためにしたことに 心を残さない

自慢しない みかえりも 求めない

執われのない 自他の対立のない 清らかな境地に なってこそ
他人の喜びを わが喜びとし
他人の悲しみ 苦しみを 自らの 悲しみ苦しみ とすることが できるようになる
慈悲の実践が できるようにな る
そのように 精進する

自他を分け 構え 対立する心を できる限り おさえ
仲良く 共存するように つとめ
「おのが身にひき比べて 殺してはならぬ 殺さしめてはならぬ」（ダンマパダ　中村元訳）

ともに 縁起 空の身で ありながら
かたくなに 立場に固執し 争い 殺す 愚かさ
これほど悲しい 人間の 闇はない
言葉や ふるまいでも
他人を 傷つけることが あるから こころする

穏やかな顔と やさしい言葉

互いに依存し 関係しあっている
自分と 家族と 社会と 自然であることに 目覚め
助けあい 支えあう
民族や国境の 壁を超え 共に生きる

「見ずや君 あすは散りなん 花だにも 力の限り ひと時を咲く」（九條武子）
「それぞれの分野で 力の限り 自他の安穏の実現を目指して 生きていく」（梯 實圓）

世界は一つ 独裁は いけない

すべての現象は 縁起している 空 である
だから 世界は一つ 国境もない
特別なところは ない
みな平等で 特別な人 ものも ない

独裁は いけない

特定の個人が 特別な人になり
政治的自由や平等 平穏や共存などが 力によって妨げられる

空なる真実に基づく 覚醒と行為 こそが
ダルマに よび覚まされ うながされる 行為こそが
人類社会に 真の平和と 平等と 共存を
そして 人知人為のものからの 解放と自由を
人々にとっての 安心と 幸福を もたらすことになる

人間が主張する 正義くらい 危ういものはない
時代や人々に 応じて いくつもの 正義がある
「われかならず聖なるにあらず かれかならず愚かなるにあらず
ともにこれ 凡夫ならくのみ
是(よ)く非(あ)しきのことわり たれかよく定むべき」（聖徳太子）

「国政は 国民の厳粛な信託に よるもので
その権威は 国民に由来し
その権力は 国民の代表者が これを行使し

その福利は 国民がこれを 享受する」（日本国憲法 前文）
国民は 主権者として 国の政治の責任者

しかし権力なくして 組織や国家などは うまく機能しない
烏合の衆にならぬため 権力は いい意味で力強く 良質で 安定している方が いいが
傲慢と独裁化 腐敗や停滞を もたらす落とし穴が ある
権力の行使には 責任がともなう ので
監視評価する体制が 有効に機能しなければ ならない

自由と 民主主義には 時間と労力と 衆愚までが つきまとう
直接あるいは 選ばれた人が 充分よく議論し 衆知を集め
一つに まとまらない時は 多数に 従い
少数者にも 聞く耳を もつ
不正や 暴力は ひかえ
失敗や間違いを おかした時は 我(が)をはらず 詫びる 改める

「わたしによって証得されたこのダンマ（ダルマ）は
甚深であり 理解しがたく 悟りがたく 分別の領域を超えており

賢者によって 知らるべきものである」（ヴィナヤ 玉城康四郎訳）と ブッダは語った「しかるに世の人々は アーラヤ（愛着・執着のこだわり）を楽しみ アーラヤを 喜びアーラヤに 喜悦する 実に アーラヤを楽しみ 喜び 喜悦する人々には
ダンマは とうてい理解できない」（同 玉城訳）と言って 沈黙された

性愛は 対象的思考に しばられる アーラヤの極み
人間は 誕生の原因となる その瞬間から 愛着と共にある
ダルマが 顕わになった状態と
人間の 本性の状態とは 全く 対極にある

アーラヤ（愛着）を楽しみ アーラヤに喜悦する ダルマをとうてい理解できない
世の人々という どうしようもない現実 にこそ
人生の 苦しみ悲しみや 争い
人類社会が直面する さまざまな難題や 袋小路から
解放されない 根本原因が ある

世界が 対象的で 固定的な思考に とどまっている限り
現状を 根本的に打開することは 難しい

対象的思考に基づく 執われる認識作用のもとに ある限り
自他の対立感を 超克できないから
私たちは 分別智や 力が支配する世界に 止めおかれることに なる
勝ち負けの思考や 憎悪の連鎖も 超えられない

最大の 難問は
国際社会が 努力し 協力して
核兵器の 禁止 廃絶に 成功した としても
核兵器をつくる 知識や経験まで なくせない
理想を求める と同時に 現実の安全保障にも 責任を負っている 政治家たち
口にしてはいけない 毒を もう食べてしまった 人間たち

指導者による ダルマの目覚めと よき政策と

世界が「宇宙を支配する 人間存在をすべて支配する 理法（ダルマ）に目ざめ
万人に開かれている理法（ダルマ）に 順応する 本当の生き方」（中村 元）に
気付き 行動しなければ
世界の平和と 安全を より確かにするのは 難しい

縁起 空であることに 教え導かれ
対立感に 束縛されぬよう つねに つとめることが 欠かせない

人類の平和と共存は 縁起 空と権力という 相いれない要素によって もたらされる
指導者による ダルマの目覚めと 適切な政策判断
それに取り組み実現する 優れた能力や 権力の行使が 欠かせない

抜本的な「国連」改革は そう簡単なことでは ないだろう
特定の五カ国が 特別な国になり 安保理で拒否権を もっている
「平和の番人」として 安保理が 機能していない現実を どう克服できるのか
少なくとも 各国が 偏狭な国益に 固執することは 自制し
持続可能な平和と 共存のために 協力することで 合意し
これらを 具体化するための 実効性ある 制度改革ぐらいは 実現させる

しかし人々が 人間の認識作用の弊害に気付かず 対象的思考に とどまる限り
どうしても 考える自分が 残ってしまうので
自己の立場 主張 利害などの執われを 超えられない
お互いが 真に普遍的な世界を 共有できなければ

新しい 平和構築の枠組みを 創り 維持することは 難しい

平和の維持が可能になる 全世界に受容される 国際機構を創出する ためにも
ブッダ・ダルマは 地球のすみずみにまで 伝わる方がいい
正しく わかりやすく 絶えることなく
しかし人類の将来は ただ言葉によるのでは ない
実生活の中で どれほどの人が
ダルマを 少しでも身につけ 誠実に実践できるかに かかっている
愚直な実践の 継続と つみ重ねに かかっている

非暴力と不服従を掲げ イギリスからの独立に 道をひらいた
マハトマ・ガンジーのような先達の 身を粉にした実践の 例もある

「如来大悲の恩徳は 身を粉にしても 報ずべし」

これはダルマによる 無条件の救いに 帰依した 親鸞聖人の言葉
慈悲と空とは 実質的には 同じこと
ブッダの慈悲の ご恩には「身を粉にしても」報いるべし と語っている

すごい 宣言である
いや 空は すべての存在に 通底する 真実
究極の境地であり 実践を基礎づけるもの
倫理的価値を 成立させる 真の基底

縁起（えんぎ） 空（くう）であることに よび覚まされ たえず 立ち帰る

現にいま 自分自身を含め 世の人々が
なにごとも対象化し アーラヤ（愛着・執着のこだわり）を楽しみ
アーラヤに 喜悦する生活から 解放されていない現実を 忘れず
だから 人生の悲苦や 世俗の難題は 簡単にはなくならない と知り
縁起 空であることに よび覚まされ 絶えず そこに立ち帰り
そのように 怠ることなく 一歩一歩 前に進むしかない

自他に分け 対象化し
執われてしまう 認識作用の 束縛から
解き放たれる 対立を超えて いく

平和の回復と維持には 学際的で 国際的な多様な視点からの アプローチも 欠かせない
現実を＜厳正にふまえ＞ 世俗の＜賢明な知見＞ も加え 適切な目標に向かって
事態が改善するよう 日々に精いっぱい 努めるしかない
よき祖先になるための 具体的な努力に 終わりはない

「世のなか安穏(あんのん)なれ 仏法ひろまれ」（親鸞聖人）

人類よ ブッダ・ダルマのもとに 平安であれ
持続可能な 共存できる 社会であれ
この地球 すべての現象は 縁起 空なのだから

「一切の 生きとし生けるものは 幸福であれ 安穏であれ 安楽であれ」
（スッタニパータ　中村 元訳）

≪ブッダ・ダルマ覚え書≫の参考文献

桂紹隆 五島清隆『龍樹 根本中頌を読む』春秋社、二〇一六年。
中村元『佛教語大辞典』上巻、東京書籍、一九七五年。
中村元『現代語訳 大乗仏典Ⅰ 般若経典』東京書籍、二〇〇三年。
玉城康四郎『悟りと解脱』法蔵館、二〇二一年。
玉城康四郎『現代語訳 正法眼蔵（六）』大蔵出版、一九九四年。
中村元『中村元の仏教入門』春秋社、二〇一四年。
福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社、二〇〇七年。
三枝充悳『縁起の思想』法蔵館、二〇〇〇年。
東京大学仏教青年会編『新装版 現代仏教聖典』大法輪閣、二〇一六年。
中村元訳『ブッダの真理のことば 感興のことば』岩波書店、一九七八年。
『浄土真宗聖典 註釈版第二版』「仏説無量寿経」「憲法十七条」「浄土和讃」「親鸞聖人御消息・自然法爾の事」本願寺出版社、二〇〇四年。
大谷嬉子編『無憂樹（あそか）九條武子全歌集』本願寺出版社、一九八三年。
梯實圓「浄土真宗本願寺派『宗報』巻頭言」『宗報』11月・12月合併号、本願寺出版社、二〇一一年。
国連広報センター”国連憲章テキスト“国連広報センターホームページ

https://www.unic.or.jp/info/un/charter/text_japanese（参照 2022-05-30）
『分冊 六法全書 平成29年版』「日本国憲法」新日本法規出版、二〇一七年。
中村元『東洋のこころ』東京書籍、一九八五年。
中村元訳『ブッダのことば』岩波書店、一九八四年。
石上智康『増補版 生きて死ぬ力』中央公論新社、二〇二〇年。

《ブッダ・ダルマ補説》と持続可能な平和について

Not Buddhism but Buddha Dharma

この文章は、耳慣れない言葉から始まります。Not Buddhism but Buddha Dharma 仏教は、ブッディズムと英訳されるのが一般的ですが、それでは一つの主義・主張になってしまいます。仏教は特殊なイズム、イデオロギーなのでしょうか。

そこには、持続可能な地球社会や平穏に人生をおくりたいと願う人にとって、とても大切なものが含意されています。正しく理解され「現代世界の諸課題の解決に向けブッダ・ダルマ（仏法）の意義と貢献の可能性[1]」について学際的な論究が進めば、これからの人類にとって欠くことのできないものの観方、生き方の指針となるかもしれません。

昔は「仏教」といわず、「仏法」といったものです。仏教という表現は日本の古典には、ほとんど出てきません。明治以降になって、キリスト教とかイスラーム教という宗教があることが分かってきたものですから、それらと区別するため、仏教という言葉が使われるようになりました。それ以前は、仏法と呼びました[2]。

この仏法という呼び名は非常に合理的です。法と漢訳されたダンマ（ダンマはパーリ語で、サンスクリットではダルマ）には色々な意味がありますが、もともとの意味は、真理とか理法とかです。この真理である法を覚(さと)った人がブッダ、仏ということです。われわれは無明(むみょう)という迷いの中で夢みている、まどろんでいる。ところが真理を見てふと目がさめる。そのような体験を持たれた方が、ブッダなのです[3]。

ブッダによって覚られた真理、すなわちBuddha Dharma仏法です。

ブッダは、この世界の創造主ではありません。誰でもブッダに成ることができる。ブッダを目標とし自らの人格を向上させ、禅定をつみ、この世界の実相、真理に目覚めた人、仏になるのです。

約二五〇〇年前、インドのブッダガヤーでゴータマ・シッダッタが開悟し、ブッダになった時、彼は一喜一憂の絶えない日常の思考や束縛から、老・病・死という苦悩の現実から、完全に解放されたといわれています。仏典のうちでも、歴史上の人物としてのブッダの言葉に「最も近い詩句を集成した一つの聖典[4]」と見なされている『スッタニパータ』には、次のような言葉が残されています。

「貪欲と嫌悪と迷妄とを捨て、命を失うのを恐れることなく、サイの角のようにただ独り歩め[5]」

頭脳的な思考も 執われも 超えた境地が あらわになる

ブッダは、どのような方法で開悟を実現したのでしょうか。さまざまな考え方があるでしょうが、厳密な文献学の研究に加え、自らも真摯な修行を実践しダルマの核心にせまった玉城康四郎氏によれば、全人格的思惟を実修するうちに、すなわち禅定に専念することで、やがてダルマが顕わになり開悟は実現した、と理解されています。

全人格的思惟は対象的思惟に対するものです。対象的思惟は通常の思惟です。「考える自分」と「考えられるもの」とが相対する時に、この思惟が成立します。仮に自分自身について考える場合でも、「考える自分」と「考えられる自分」とが相対するから、やはり対象的思惟です。日常生活からすべての活動の場、また科学的思考にいたるまで、ことごとく対象的思惟でないものはありません。思惟といえば、すべてこの思惟に属するのです(6)。

対象的思惟がいわば頭脳的な思考であるのに対して、全人格的思惟は、頭も心も体までも一つになって営む思惟です。全人格体が一体となり、ひとかたまりとなって坐るのです。身心全体が一つになっているから、その意味で全人格的思惟と呼ばれます。ここでは「考える自分」と「考えられる自分」とが一つになって

いるばかりでなく、「考える自分」と全世界、全宇宙とが一つになっているのです[7]。

対象的思惟は、主観と客観とが相対して成立している思惟です。これに対して全人格的思惟は、主観即客観、客観即主観、主観と客観とが一体となっている思惟です[8]。前者が分別智であるのに対して、後者は、古来、無分別智といわれてきました。

対象的思惟は、科学技術の分野では、利便性の向上や豊かさをもたらします。病気の予防、診断、治療、さまざまな施術や新型コロナウイルスに対するワクチンも供給してくれます。その一方で、核兵器を含む殺人の手段までつくります。のみならず日常の生活では、どうしても認識の対象を固定化し執着してしまいますから、自と他の対立感が常態化し、争いを生みだします。損得・好き嫌い・良し悪し・ジェラシーなどさまざまな悲喜の原因をつくり、人々をしてはてしなく悩み苦しめることになるのです。対象的思惟のもとでは、真の自由も平等も平穏も確かなものにすることはできません。対象をどうしても固定的・静止的にとらえてしまいますから、真実の境地との乖離が生じます。

たとえば一般の人においては、愛は喜びであり、ぬくもりと安らぎをもたらします。いのちの源です。しかし同時に愛は執(とら)われ。苦しみ悲しみのはじまりでもあります。

ゴータマが開悟した時、彼の口をついて出た最初の第一声が『ウダーナ（自説経）』に記されています。第三のウダーナ・明け方の偈はこう伝えています。

「実にダンマ（法）が、熱心に入定しつつある修行者に顕わになるとき、かれは悪魔の軍隊を粉砕して安立している。あたかも太陽が虚空を照らすがごとくである[9]。」

開悟についてブッダは、「ダンマが修行者に顕わになる」と述べています。これが覚りの原点です。ここで重要なことは、悪魔の軍隊を、すなわち煩悩（貪欲やいかりや愚痴など身心を思い悩ませる執われの心）を粉砕し安立している境地、その当体をダンマといっていることです。したがってダンマとは、対象的思惟を超えた境地であり、日常的な認識作用による「意味も思想も超えた語[10]」ということになります。事実、ブッダ自身、入定（禅定に入る）中に次のように宣言されています。

「わたしによって証得されたこのダンマは、甚深であり、理解しがたく、覚りがたく、寂静で……分別の領域を超えている[11]」

ダンマは深く、覚りがたいものだという。なぜならば、ダンマは「分別の領域を超えている」とブッダ自身が語っているからです。「分別の領域を超えている」という宣言は、ダンマが、考える自分と考えられるものに二分化し相対する対象的思惟、日常の認識作用が働き出す以前のものだということを意味しています。主観と客観とが未分の、頭脳的思考も執われもいっさい混在しない、在るがまま

のそのままが、本来のまま顕わになっている境地、それがダンマということになります。分別智を超えた在るがままのそのままが、ブッダの全人格体に顕わになったのです。

玉城康四郎氏は「ダンマとは、そういう言葉ではない。ブッダの教えに従って通達してみれば、形なきいのちというほかに表わしようがない(12)」と語っています。

ダルマ（ダンマ）は、言語表現のとどかない、一切の相対的・限定的ないし固定的なわくの取り払われた真に絶対・無限定な真理の世界です(13)。そうであればこそ、逆にまた、約二五〇〇年もの長きにわたる仏法の歴史を通して、無常・無我・縁起・空（くう）・自然（じねん）などさまざまな言葉によって、その真実を解き明かそうという人知の努力がつみ重ねられてきたのです。

嬉しいとも 悲しいとも いっていない「無常」

人はみな行く雲、流れる川と同じ、仮に同じ一つの名前を使っているだけです。「時とともに万物は変化している」、これはレオナルド・ダ・ヴィンチの言葉です。現代の科学者ルドルフ・シェーンハイマーは体脂肪でさえもダイナミックな「流れ」の中にあり、「流れ自体が『生きている』ということ」だと報告しています。「変

化こそが 生命の真の姿[14]」なのです。

変わらない、固定した形あるものとしては、何も存在していません。いつでもどこにでも、無常の風が吹いている。それは証明を必要としないこの世の事実です。しかし人間は、変化に逆らい不変と思い誤り、その時どきのすがたに執われて、嘆き悲しんだり喜んだりしてしまうのです。花は美しく咲いても自慢しないし、いつまでも咲いていたい、と欲ばりません。

気がつかぬほどに、あるいは劇的に無常の風が吹いています。ただそれだけ。無常であることそれ自体は、嬉しいとも悲しいとも何もいっていません。自他に分け、対象化し、なにごとも静止的にとらえてしまう人間の認識作用が、真実を観えなくさせているのです。たとえば涙が止まらない、最愛の人との最後の別れなどがそうです。

『ダンマパダ』は、次のように説いています。

「こと・ものすべて 無常なり と智慧もて 見とおすときにこそ 実に 苦を 遠く離れたり これ 清浄にいたる道なり[15]」

清浄とは、執われのない完全に清らかな境地、清浄にいたる道とは、覚りにいたる道のことです。すべての現象が変化しているという事実を正しく観(かん)じることができるようになれば、苦しみから解放される、つまり、覚ることができると経典は教えています。

今ここを不変と思い誤り、変わることなかれと逆らう人間にとって、変化は苦しみ悲しみのもとになります。全人格的思惟のもとでは、そのような不幸は起こりません。在(あ)るがままのそのままが、本来の裸のまま、その人の全体に顕わになっているからです。ブッダ・ダルマを観じられないから、在るがままのそのままになれないから、楽になれない。自業自得のなりゆきです。

レオナルド・ダ・ヴィンチも万物の変化には気付いていたようですが、はたして対象的な思考を超えることができていたのかどうか。それは知るよしもありません。

「無我」とは、私がない、ということではありません。固定した変化しない実体としての私などという存在はない、という意味です。

この世の実相、真実を覚ることができていない人は、医師から怖いことを宣告されると、ストレスがアップするはずです。不安になったり思い悩んだりすることになります。変化している現実が私の思いと対立し、我利我欲が打ちくだかれるため、苦となるのです。いのちを「私のもの」と錯覚し、一番大切な「私のいのち」が奪われる、なくなることなど、すぐには受け入れられません。苦しみや悲しみ不安には、この世の真実に逆らう「常住(じょうじゅう)に執着すること」がかくされているわけです。

無我説は、このかくされている執着を破壊し、固定的な「私」とか「私のもの」という執われから解放され、「正しい在り方の自己を実現しようとするのです[16]」。忘れてならないことは、無常も無我も、縁起という真理観との関連で理解される思想だということです[17]。

すべての現象が縁起(えんぎ)していることを空(くう)であるという

もし、ものが変わらないで永続するならば、それは生ずることも、存在することも、滅することもないはずです。なぜなら、生起・存在・消滅は、いずれも変化にほかならないからです。いいかえれば、あらゆるものは、固有の実体とか本性とかをもっていない、だから空である、ということになる。ものは原因や条件しだいで生じ、原因や条件がなくなれば滅するだけのものです[18]。

変化しない実体というものはなく、実体がないからこそ、かたちをつくれるのです[19]。

「降りだして 田植えいよいよ にぎやかに」（長山秋生）

天と地と水と、そのつながりの中で人も生きています。いのち在(あ)らしめられています。すべてのこと・すべてのものは、原因やさまざまな条件、縁が互いに関

係しあい生起している、縁(よ)って起きている。「縁起」しています。独立自存のものではありません[20]。

ナーガールジュナ（龍樹）の『根本中頌』第二十四章の第十八偈と第十九偈には、次のように説かれています。

［諸々のものが何かを］縁として生起すること（縁起）を
我々は［諸々のものが］空であること（空性）と言う（中略）
［何かを］縁とせずに生起するものは 何ら存在しない
したがって 空でないものは 何ら存在しない[21]（『根本中頌』桂紹隆訳）

すべての現象が、縁起していることを「空」であるという。何かを縁としないで生起するものは、何も存在しない。したがって、空でないものは何もない、とナーガールジュナは説いています。だから固定した実体、すがた・かたちなどは何もありません。対象的思考に基づく執われが、善し悪しや喜び悲しみなどが、まぎれ込む余地はありません。得るものがない、失うものもない。

ブッダ・ダルマから観れば、ブッダがご覧になれば、ただ真実があるだけの境地です。

……カッチャーヤナよ「あらゆるものは 有である」というなら これは一つの極端な説である。「あらゆるものは 無である」というなら これは第二の 極端な説である。 ……如来（ブッダ）は これら両極端に 近づかないで 中［道］によって 法を説くのである[22]（『サンユッタ・ニカーヤ』「カッチャーヤナ・ゴッタ経」五島清隆訳）

真実は、有と無の二つの極端を離れています。中道です。

われわれは観（み）るもの経験するものが、固定的な実体をもっていると思っていますが、そのような永久不変のものは、何も形あるものとしては存在していません[23]。つまり空である。空は、固定的実体のないことを因果関係の側面からとらえた縁起と同義です。縁起している事実のほかに、固定した実体は何もない[24]。縁起している事実をさまたげる執われや悪など、何もありません。

「つねに縁起が根本であり、空は帰結です。縁起によって空観（くうがん）は基礎づけられます[25]。」

あの『般若心経』に説かれている「色即是空 空即是色」の空です。

生と死も 空であるから 区別できない 不二（ふに）のもの

あなたも私も、縁起する世界の中で、みな、縁起しているいのちを生きている。そして縁起している事実の中で死んでいくのです。一見対立している二つのもの、生と死も、ともに空であるから本質的には不二（分かつことのできないもの）です。

空は必然的に不二の真実に導きます。もしAなるものに実体がなく、Bなるものにも実体がなければ、AとBとは、ともに実体の空なるものとして、区別されず、分かつことのできないものとなります。すなわち、不二であるということになる。一見対立している二つのもの、たとえば煩悩と覚りは、ともに空であるから、本質的には不二である。生死流転していることと、そこからの解放である涅槃（ねはん）（人間の煩悩や迷いがすべて消滅している覚りの境地）との二つも、区別できない、不二のものです[26]。古来、「生死即涅槃（しょうじそくねはん）」といわれてきました。

ダルマに通達した智者は、次のように語ります。

「この諸法（いろいろのもの）は、空を特質としています。（中略）すなわち現象世界においては、いろいろな力が加わって生じたり、滅びたりしているのですが、高い境地からみると、ただ偉大なる一つのことわりがあるだけで、生じても滅してもいません。（中略）ただ偉大なる真実が、そこにあるだけです[27]」

空なる真実は、全人格的思惟によって証得される境地です。求道者が、縁起・空であることにうながされ、よび覚まされ、固定的な認識作用、一切の執われから解放され、日常の身も心も脱落し、私という構えもすっぽり抜け落ちて完全に

自由になれる時、在るがままのそのままが、分別の領域を超え、本来のまま顕わになってきます。ただ偉大なる一つの真実が、そこにあるだけです。

ブッダ・ダルマについて、それを受け入れるも、受け入れないもありません。そのような議論などの入る余地がない。空なるダルマは、対象的思考による知的分別が働き出す以前の、在るがままのそのままの境地だからです。通常の認識作用が、分別智が邪魔をして、それが観えない。証得できていないだけのことです。

宋の時代、中国に渡りダルマについて正しく学び、日本曹洞宗の開祖となった道元禅師は「この生死は すなわち 仏の御いのちなり[28]」と書き残されました。すべての現象は、ダルマの当体そのものなのです。「峯の色 谷の響きも 皆ながら 吾が釈迦牟尼の声と姿と[29]」とも詠んでいます。

空は 虚無でなく 実践を基礎づける もの

空は虚無を説くのではありません。空は、あらゆるものを成立せしめる原理です。それは究極の境地であるとともに実践を基礎づけるものです。もろもろの倫理的価値を成立させる真の基底です[30]。

したがって、ブッダ・ダルマと共にある人々の行為を律する基本は明確です。『華厳経』には、次のように説かれています。

「行為の主体とその行為との二つは、ともに空である。空であるから、それらを求めても〈不可得〉である。この〈不可得〉という道理こそ、ブッダたちの依りどころである[31]」

この世の実相は縁起・空ですから固定した実体はないので、求めても得られるものはなに一つありません。この空ゆえに不可得という道理こそ、ブッダたちの依りどころだという命題は、仏道の本質を実に簡明直截に教えています。縁起・空ということがこの世の真実である以上、行為者も、行為そのものも、縁起・空観に基づく整合性のとれたものにならなければ正しいとはいえない、という考え方です。これが、ダルマを依りどころに生きる人とその行為を律する基本です。したがって、私のものとしての、譲ることのできない権利などという思考が入りこむ余地はありません。

言動が空観に導かれる時、人は何にも執われることがないままに心をはたらかせ、そのように行動するようになるということです[32]。

『金剛般若経』は、「菩薩（すぐれた道を求める人）は、ものにおいて、まさに住するところ無くして布施を行ずべし[33]」と教えています。

布施とは、他者のために自分のものを施し与える行為です。求道者はものに執われて施しをしてはならない、自分のものを執着の心なしで人に与えるのです。オレがあいつにこういうことをしてやったのだ、という思いが残っているうちは、

いまだ執われがあります。恩に着せるといった類の意識や何らかの打算があるうちは、本物の布施行といえないでしょう。他者のためにしたことに、心を残さない。したがって自分の行為を自慢したり、見返りを求めるような心が生じないままで与えるのです。

他人と相対している時、その人が自分と別の存在であると思っている限りは対立感があります。あなたはいつまでもあなたとして、私は私としてずっと続いている、そこに隔てがあります。けれども隔てなどというものは仮のものではないか。お互いに因縁が集まって、こちらの人はこう現れ、あちらの人はまた別の形で現れる。ともに因縁によって現れたわけで、この不思議な因縁に（縁起しているという空なる真実に）目を覚ます時、自他の対立感はなくなります。このような執われのない清らかな境地になってこそ、慈悲の実践が可能になるのです[34]。

他人の喜びをわが喜びとし、他人の悲しみ苦しみを、自らの悲しみ苦しみとすることができるようになるのです。

「救う主体も 救われるものも 救われて到達する境地も 空」

究極の慈悲行（じひぎょう）は、ブッダによる絶対で無条件の救いのメッセージとして、苦悩するすべての人にとどきます。等しく至りとどいている。それを親鸞聖人は「念

仏の衆生（しゅじょう）をみそなはし 摂取してすてざれば 阿弥陀（あみだ）となづけたてまつる[35]」「真実は 阿弥陀如来の御こころなり[36]」と聞かれたのです。疑いなく信じ任す人を、凡愚のまま救い取ってすてないブッダ、それが阿弥陀仏だという理解です。『歎異抄』の第一条には「悪をもおそるべからず 弥陀の本願（慈悲）をさまたぐるほどの悪なきゆえに[37]」と教示されています。

「救う主体も空 救われるものも空 救われて到達する境地も空[38]」なのです。

空とは、縁起しているということでした。すべての現象は、いま現に縁起しています。空なる真実に救い取られ、すてられることはありません。

この世の縁がつき力なくして終わる時、その時の姿のまま死ねば、それでいいのです。恰好などつける必要はない。つけられるものでもないでしょう。「それでいいのです。」このカッコでかこんだ言葉こそが、真実から等しく至りとどいている救いのメッセージです。

地震の下敷きになるかもしれない。津波にのまれるかもしれない。コロナ禍でＩＣＵに入れられるかもしれない。お念仏も出ないかもしれません。その時は、なるようにしかならないでしょう。こちらの事情を問わないのが阿弥陀仏の「摂取不捨」なのですから、なんの心配もいりません。

慈悲と空とは、実質的には同じです。哲学面からみると空ですが、実践面からいうと慈悲になります[39]。

すべての現象が縁起していることを、空であるといい、何かを縁としないで生起するものは何も存在しません。したがって空でないものは、何もありません。生と死も、ともに空であるから、本質的には区別できない不二のものです。

「ちかひのやうは 無上仏(むじょうぶつ)にならしめんと誓ひたまへるなり 無上仏(むじょうぶつ) と申すは かたちもなくまします かたちもましまさぬゆえに 自然(じねん)とは申すなり[40]」

と説きあかされています。この世の縁がつきる時、分別することのやまない日常生活の束縛から解き放たれて、執われもなく何もなく、縁起するまま、まるまる「自然(じねん)」の世界に迎え取られていくのです。

このようにいくら聞いても、実感として安心できないかもしれません。なかなか安心できない、死にたくない。「そのままでいい そのまま救う」とブッダの慈悲の心を聞かせていただき、安心するのです。愚者のまま、このままで死んでいくしかない。「それでいい」。これが、空なる真実からとどいている慈悲の言葉の極みです。

この世の縁がつきる時、縁起するまま、執われもなく何もなく「自然(じねん)の浄土[41]」に、迎え取られるのです。

このようにブッダ・ダルマは、難行(なんぎょう)・易行(いぎょう)の違いを超え、人間存在の根源的な課題に究極的な解決の道を教えています。それを自覚し覚ることができるか、正

しく聞くことができるか否かは、こちら側の問題です。ダルマについて正しく学びを深め、おこたることなく修行につとめ、あるいは聴聞を重ねることです。

ブッダは 人間について 悲観的だった

ゴータマ・ブッダは覚りを開いたのち、自分の覚ったことを世間の人々に説くのを躊躇し、梵天の勧めで世の人のために説くことを決心されたといいます。そこに至るまでの間に、次のような注目すべき記述があります。

ブッダが「わたしによって証得されたこのダンマは、甚深であり、覚りがたく、（中略）分別の領域を超えている」と宣言されたことは先述した通りです。しかしここで終わらなかったのです。ブッダによって証得されたダンマは「微妙であり、賢者によって知らるべきものである」といい、これにつづいて「しかるに世の人々は、アーラヤ（愛着・執着のこだわり）を楽しみ、アーラヤを喜び、アーラヤに喜悦する。これらの人々には、ダンマはとうてい理解できない」といって、ブッダは沈黙されていたのです(42)。そして次のような詩句が尊師（ブッダ）の心に思い浮かんだとされています。

「わたくしが覚り得たことを、いま説く必要があろうか。貪りと憎しみにとりつかれた人々が、この真理を覚ることは容易ではない。・・・深遠で見がたく、微

細であるから、欲を貪り闇黒に覆われた人々は見ることができないのだ[43]」

世の人々は欲を貪り闇黒に覆われているため、「真理を覚ることは容易ではない。見ることができない」というのです。

アーラヤ（愛着・執着のこだわり）を楽しみ愛着に喜悦する生活とは、対象的思考の領域を超えられない、何ごとにも執われてする生活のことでしょう。私たちは自分自身を忘れられない、自分の存在を常に意識する生活に終始しているといっていいのかもしれません。特に性愛は、対象的思考にしばられる愛着の極みでしょう。しかも本能そのものですから、人間は誕生の原因となるその瞬間からアーラヤと共にあるということです。多くの人は賢者ではありません。死に臨むその時まで、愛着による執われから解放されることは容易なことではないのです。このように、ダルマが顕わになった状態と人間の本性の状態とは全く逆であり[44]、まさに対極にあることが知られます。大半の人々は煩悩具足（ぼんのうぐそく）の凡夫（ぼんぶ）なのです。私たちは、自分自身を過信してはいけません。

ブッダは開悟の時点において、すでに人間について悲観的だったのです。ダルマをとうてい理解できない世の人々という現実にこそ、人間社会が当面する諸種の難題から、その袋小路から抜け出せない根本原因があるといっていいのでしょう。

私たちは、自分自身が常にアーラヤと共にある日々の現実に目覚めることから

始めなければなりません。人間に内在する愚者性――ブッダ・ダルマの唯中（ただなか）にありながら、その対極においてアーラヤに喜悦する生活をしているという人間の現実、すべての現象に通底している、空ゆえに不可得という真実に徹しきれない私たち一人ひとりの愚かさこそが、個人の苦しみ悲しみにとどまらず、人類の平安と共存を脅かす最大の要因になっているということです。

知的分別を うまく はたらかせても 限界がある

対象的思考による知的能力を駆使し科学技術を進歩させ、宇宙に行き、無事、地球に帰ってこられる時代になりました。しかし地上では、依然として人間は、国境や民族の壁を超えられないままです。自他の対立感を克服できないところで生きているからです。

主義や主張があふれています。争いが絶えない。暴力や一方的な力の行使、威嚇もあります。二〇二二年二月に起こったロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、その典型です。格差や分断が進むとともに、気候変動によって私たちは生存に関わるリスクに晒されています。世界の現状は、決して自由でも平等でも平和でもありません。人類の持続可能性にとって脅威となる難題に展望が見いだせないまま、私たちは袋小路に入っているようです。

二〇一六年五月二十七日、バラク・オバマ氏は米国の現職大統領として初めて広島を訪問、平和記念公園で原爆死没者慰霊碑に献花したあと、スピーチを行いました(45)。

大統領は「人間社会に同等の進歩がないまま技術が進歩すれば、私たちは破滅するでしょう。原子の分裂を可能にした科学の革命には、倫理的な革命も必要」と語りました。しかし残念ながら演説全体を通し、核兵器なき世界への確固たる決意や展望は見えません。広島や長崎は「倫理的に目覚めることの始まりとして知られるようになるでしょう」と演説を結んでいますが、「倫理的な革命」の中身について特に新しい言及はありませんでした。

第二次世界大戦後、地域紛争や戦争がありましたが、世界大戦は回避されています。一部の論者からは絶対悪と批判されていますが、結果として、核兵器による抑止が機能しているのかもしれません。核抑止とは、受け入れ難い核報復を覚悟する必要があるので、攻撃に出るのを断念せざるを得ない核戦力による脅しの政策です。しかもそれは、高度に精密化した機械システムと人間の判断力に依存していますから、事故やミス、誤算や想定外の事態などで核が使われてしまうリスク――空前絶後の破壊の可能性がつきまとっています(46)。

最近では、物理的に早期警戒衛星・偵察衛星・通信衛星などの衛星破壊をやらなくてもサイバー攻撃やジャミングで宇宙のブラックアウトができる、といわれ

ます。核兵器とそれを支えるシステム全体の脆弱性は大きくなっています。少なくとも当分の間は、核兵器の存在を前提とした上で、抑止が機能する環境をどうやって作るか、それに伴う誤認や予想外の事態によって生じるかもしれないさまざまなリスクをどう減らすか、という話が非常に大きなテーマになっているということです[47]。

世界はなぜ、核抑止力を手離せないのでしょうか。現状、相互不信と対立から根本的に解放され、等しく帰一できる依りどころ、平和共存を可能とする普遍的な基底と安心をもたらす国際的な制度を人類はいまだ共有できていないからです。

「譲ることのできない権利」という考え方で 真の平和を 創れるか

スピーチの後段においてオバマ元大統領は、「万人は平等に創られ、また生命、自由及び幸福追求を含む不可譲の権利を、創造主から与えられている[48]」という「アメリカ独立宣言」冒頭の言葉を紹介しています。こうした理想を実現することは容易ではないが「努力すべき理想であり、大陸や大洋をまたぐ理想だ」と明言しました。

「アメリカ独立宣言」だけではありません。「世界人権宣言[49]」も、前文は「人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利とを承認

することは、世界における自由・正義及び平和の基礎である」という一文から始まります。そして「人間が専制と圧迫とに対する最後の手段として反逆に訴えることがないようにするためには、法の支配によって人権保護することが肝要である」と述べています。ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世も、東西冷戦下、ヨーロッパにおける中距離核戦力の直接対決で緊張が一気に高まった一九八二年に「各人の消滅しない不可譲の権利の無条件で効果的な尊重は、ある社会に平和が支配するために必要な条件である[50]」と主張しました。

これらの宣言や主張に共通するキーワードは「不可譲の権利（inalienable rights）」です。

しかし自由・正義・平和の基礎とされる「譲ることのできない権利」という考え方には醒めて見た方がいいでしょう。人権は不可譲の権利ということになると、それが抑圧され侵害されれば「最後の手段として反逆に訴え」なければならなくなり、争いになります。最近の事例でいえば、一九九九年、旧ユーゴスラビアのコソボ自治州をめぐる紛争で、アルバニア系住民に対する「民族浄化」を阻止するため、ＮＡＴＯ北大西洋条約機構軍は空爆を行いました。実際、「人権の擁護」の名目で、武力攻撃が正当化されています。

人権思想には、光と影がある。

従来型の思考に留まっていては、力の文明を超克することはできないでしょう。

ブッダ・ダルマの境地から観れば、自他の対立などありません。すべては、空なるものとして区別されず、分かつことのできないもの、すなわち本質的には不二の世界です。いつまでも自分と相手に執われる対象的思考にしばられ対立している限り、地上における平和も共存も確かな基底の上に創り上げることなどできようはずがないのです。

法の支配によって人権が保護されない場合、「不可譲の権利」ですから、それを侵し害をなす他者は排除されなければなりません。相手が力をもって侵害・抑圧してくれれば、こちらも力をもって抵抗するしかないでしょう。譲ることのできない権利ゆえ、それは守られなければならないからです。ウクライナは、ロシアの武力侵攻にまさに力をもって抵抗しています。

一九七七年頃からブレジネフのソ連がヨーロッパ正面に中距離核戦力SS20を配備したことに対し、西側は交渉すると同時に、アメリカのパーシングⅡなど核の配備でSS20の脅威と均衡をとる対抗策をとりました(51)。核には核をもって西側を、不可譲の権利を守るという力の政策です。武力による威嚇にのぞんで自己の主義・主張を守り貫徹するには、犠牲やリスクをとる覚悟が必要です。

事実、ローマ教皇ヨハネ・パウロ二世は一九八二年の第二回国連軍縮特別総会に送った声明で、次のような「断」を下したのです。

「現在の状況下において（in current conditions）、均衡に基づく抑止は、漸進的な

軍縮に向かう途上の一ステップとして、なお道徳的に容認可と判断されよう（may still be judged morally acceptable）[52]」

ここでいう「現在の状況下」とは、中距離核戦力の配備をめぐる東西直接対決という冷戦下の切迫したヨーロッパの政治状況を意味しています。なお「交渉」を勧めているとはいえ、均衡に基づく核抑止が「道徳的に容認可」といいきった点が重要です。ローマ教皇は、核抑止力の容認で西側世論の形成にひと役かいました。というより、バチカンはソ連（当時）の支配下に入るより、教会の存亡にかかわる権利である信教の自由を守ることを、リスクがともなおうとも優先させたということです。条件つきとはいえ、核抑止力を容認し「不可譲の権利の尊重は平和のために必要な条件」という自らの主張を貫徹したのです。

核兵器をつくる 知識や経験まで なくせない という難題

禅を中心に仏法の真理観を世界に伝えた鈴木大拙氏は「西洋の人々は、物が二つに分かれてからの世界に腰をすえて、それから物事を考える。東洋は大体これに反して、物のまだ二分しないところから、考えはじめる[53]」と指摘しています。そして彼は次のように警告するのです。「二分性から生ずる排他性、主我性などは、はなはだ好ましからざる性格である。二分性を超越して、しかもそれを包含する

ことになれば話はわかるが、これがないと、喧嘩が絶えない[54]」と。

『仏説無量寿経』には、「ブッダが歩み行かれるところは、その教えに導かれないところはない。そのため世の中は平和に治まり、（中略）武器をとって争うこともなくなる[55]」と教示されています。お互いがブッダ・ダルマに教え導かれ、自分と他者への執われから少しずつでも解放されていく時、自他をわけ、構え、対立し、最後まであい争うような愚行が起こるはずはありません。憎悪の連鎖からも解き放たれていきます。

「実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以ってしたならば、ついに怨みの息（や）むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である[56]」

処世において怨念の敗者にならぬよう心しなければなりませんが、同じように、怨念の敗者をつくらぬよう注意深く賢明であることも求められています。しかし、この地球上で広くダルマが自覚されゆきわたるまでの間、武器のいらない自由で平和な世界をどう創り、どう維持すればいいのか。いまだ解決策のない、人類にとっての難問です。

最大の難問は、国際社会が努力し協力して核兵器の禁止・廃絶に成功したとしても、核兵器をつくる知識や経験まではなくせない。この現実にどう対処すればいいのか、できるのかということです。政治家は理想を追求すると同時に、あらゆる事態を含む常に現実の安全保障にも、責任をおっています。核兵器という口

にしてはいけない毒を、もう食べてしまった人間たち……。

平和をより確かなものにするため、袋小路から人類は抜け出ることができるのかという難問です。

ロシアとウクライナ――二〇二二年 国家間の破壊と殺戮がすすむ

難問に確たる見通しがたたない中、二〇二二年二月二十四日、ロシア連邦は隣国ウクライナへの軍事侵攻に踏み切りました。専門家は次のように警告しています。

「核保有国が、核の威嚇を伴う強い決意で非保有国への侵略戦争を始めると、誰も止められない可能性が出てきた[57]」。国際社会の無力さと混迷が露呈しています。

しかし、いかなる主張や理由があろうとも、武力で一方的に現状を変更しようという暴力行為はゆるされるものではありません。戦争は無辜の人々をまきこむ殺し合いです。地獄になります。

一九三カ国が加盟する国際連合（以下、国連）は三月二日の緊急特別総会で、ロシアを非難し即時撤退を求める決議案を一四一カ国の賛成で採択しました。決議は、ウクライナ侵攻を「侵略」とみなし、「国連憲章に違反する」と断じました。

そもそも国連は、二十世紀、「二度まで言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の

惨害から将来の世代を救い、基本的人権と人間の尊厳（中略）に関する信念をあらためて確認し（中略）国際の平和及び安全を維持するため[58]」（憲章前文）に創られた組織です。その第二条の四には「すべての加盟国は、その国際関係において、武力による威嚇又は武力の行使を、いかなる国の領土保全又は政治的独立に対するものも、また、国際連合の目的と両立しない他のいかなる方法によるものも慎まなければならない[59]」と明記しています。創設時の責任ある一員であるロシア（旧ソ連）が、これを公然と踏みにじる暴挙に出たのです。

プーチン大統領は四月十二日、ロシア・アムール州での記者会見で「目的はウクライナ・ドンバス地方の人々を救うこと、ネオナチから人々を救いロシアの安全を確保するため他の選択肢はなかった」と主張しました[60]。

安全保障理事会は国連の中で唯一、加盟国を拘束する決定権を持っています。しかしその「平和の番人」も、武力侵攻を止められなかった。無条件撤退を求める決議案の採択は、常任理事国ロシアの拒否権という特権で否決されたからです。平和と安全の維持という国連の目的はロシアによって反故にされ、機能していません。

この点に関連して、外務事務次官や国連大使を経て国際司法裁判所（ＩＣＪ）で日本人初の所長を務めた小和田恒氏は、五月二十四日、オランダ・ライデン大学における記念講演で次のように述べています。

「ロシアのウクライナ侵攻は、国連憲章に基づいて世界の集団的安全保障をになう正当性を常任理事国に任せるという国際社会の信頼を完全に破壊した。この国際社会の信頼が破壊されたことこそが、国連憲章のもとで創られた革新的管理システムに対する最も深刻でパーマネントなダメージ（the most serious permanent damage）だと、私は考える[61]」

戦禍をのがれ国外に出たウクライナ難民は、国連難民高等弁務官事務所によれば、四月十九日現在、五百万人を超えました。

中国の李克強首相は全国人民代表大会閉幕後の記者会見で、ロシアの侵略を非難していません。それだけでなく、「各国の合理的な安全保障上の懸念も重視されるべきだ」と擁護し、対露制裁には反対しました[62]。中国は国連憲章の尊重より、自国の立場を優先させたのです。

四月七日、ＮＡＴＯの外相会合に招かれたウクライナのクレバ外務大臣は「私の要求は三つしかない」と述べ、「weapons（武器を），weapons and weapons」と強く訴えました。自分の国は自らが武器をとって戦い守るしかないという決意表明です。外電は、ＮＡＴＯ加盟の各国が供与する兵器の水準を上げたと伝えています。ウクライナは、支援をしてくれた国に感謝する動画を公開しました。領土と独立、平等や自由など不可譲の権利を守るためには戦場で勝たなければならないので、先立つものは武器なのです。

軍事侵攻から三カ月を迎えた五月二十五日、ＮＨＫとの単独インタビューでゼレンスキー大統領は「独立と自由のため戦う」と明言しています。

持続可能な 争いの出口 について――ブッダ・ダルマから の応答

力には力で対抗するしかないという悪循環に入っています。国家間の破壊と殺戮は進み、いくところまでいかないと止まりません。

元外務省主任分析官で作家の佐藤優氏は、ロシアの政府系テレビ「第一チャンネル」に登場する政府や議会幹部、知識人たちは「本心からロシアのウクライナ侵攻には大義があると信じている。事態は極めて深刻で、プーチン大統領と同じ発想をするようになっている。ロシアは急速に別世界になりつつある(63)」と報告しています。さらに一カ月後、「西側が正しい情報をロシアに提供すれば、プーチン氏の権力基盤が崩れるというようなことにはならない(64)」と分析しています。

他方、軍事力行使に慎重だったドイツのショルツ首相は、ロシアの侵攻三日後の二月二十七日、加盟するＮＡＴＯの要請をふまえ、国防費をＧＤＰ比２％以上に直ちに引き上げると表明しました。中立を維持してきたスウェーデンやフィンランドは、ＮＡＴＯ加盟に舵をきるという具合です。

それぞれの立場や主張があるのでしょうが、経典の言葉でいえば、二十一世紀

の現在、世界はまさに五濁悪世（ごじょくあくせ）（飢饉や疫病、戦争など五つのけがれに満ちている悪世）なのです。

争いの出口は、あるのでしょうか。これ以上の武力と武力の衝突を防ぎ、世界の平和と安全の維持が真に持続可能となる出口です。ロシアや中国などの強権的な勢力もグローバル経済に組み込み、繁栄をめざそうとしてきたポスト冷戦期が崩壊し国際秩序が深刻な打撃を受けている今、これは最も緊要で難しい課題の一つです。

ブッダ・ダルマは、何人も否定できないこの世界の在るがままの実相に気付いていく真理観を共有することで、はじめて、根本的な出口の依りどころが見えてくるだろうと応答しています。現在のものの観方、とらえ方を超え、生き方も変えることです。分別智による力の文明ではなく、ダルマによる人類の救済にむけて努力することです。

認識作用に人為のものを一切まじえず、存在の根源について、その在りようについて、まず、在るがままに、そのままに認識できるよう努めなければなりません。そこからの学びと無分別智というもう一つの智慧が、対立と争いの芽を根底から摘むことにつながるだろうからです。行動もそのようになるよう転換することで

す。たとえブッダのように完全に行うことができなくても、そのように共に努めることが肝要で不可欠なのです。このような目覚めと行動こそが、真に平和的で建設的なのだと気付くことが必要なのです。

日本には「急がば回れ」という諺があります。成果を急ぐなら、一見迂遠でも着実な方法をとった方がいいという意味です。

ブッダ・ダルマについて、その本質と生き方が、正しくわかりやすくまず日本人に、そして世界の人々に伝わるよう努めることが全ての始まりであり、欠かせないということです。その任には非力の者と知りつつ、挑戦する取り組みの一つとして、先学諸氏の業績をふまえ、「受けつがれてきたもの よき祖先になるための≪ブッダ・ダルマ覚え書≫」とこの≪補説≫を書きました。

如是我聞――≪覚え書≫の結びは、次のように書き記されることになったのです。

人類よ ブッダ・ダルマのもとに 平安であれ
持続可能な 共存できる 社会であれ
この地球 すべての現象は 縁起 空なのだから

しかし、人類社会の平和と共存は、ただ言葉や願いだけで実現するものはあり

ません。「貪欲と嫌悪と迷妄とを捨て 命を失うのを恐れることなく サイの角のようにただ独り歩め」。これはブッダの言葉です。ブッダ・ダルマのもと、私たち一人一人が一歩一歩、前に進むことです。朋の輪がひろがれば、なお素晴らしい。よき祖先になるための具体的な精進に、終わりはありません。

仏教伝道協会理事長桂紹隆博士（京都大学）には、本稿の基本となる仏法理解、特に縁起・空観についてご校閲を賜りました。誠に有難く、先生のご高導がなければ前に進めなかったことを思い、ここに心からの感謝と御礼を申し上げます。英訳作業についてもご教導お力添えを賜りました。ご多忙の中、ご高配を頂戴し恐縮至極に存じております。本当にありがとうございました。武蔵野大学名誉教授ケネス田中先生とは、二〇〇二年一月二十四日、全日本仏教会理事長としてローマ教皇ヨハネ・パウロ二世から招請をうけイタリア・アッシジでの「世界平和祈りの日（Day of Prayer for Peace）」と、前日のバチカン市国における宗教者代表によるフォーラム「世界平和に向けた宗教の貢献」にご一緒させていただいたとき以来のご縁です。この度もまた、英訳につき先生のご尽力がなければ拙文が世界へ

届くことはなかったのです。衷心より御礼申し上げます。

なお筆者は、二〇二二年十月現在、浄土真宗本願寺派（西本願寺）の総長及び龍谷大学理事長の職にありますが、この≪ブッダ・ダルマ覚え書≫と≪ブッダ・ダルマ補説≫等は、宗派や龍大の見解を代表するものではないことを付記いたします。

≪ブッダ・ダルマ補説≫と持続可能な平和について の註

（1）学校法人武蔵野大学 創立百周年記念事業カンファ・ヴィレッジ・プロジェクト運営委員会規程第一条（設置及びプロジェクトの目的）第二項に、「本プロジェクトは、本学の建学の精神であるブッダ・ダルマ（仏法）の根本をふまえ、現代世界の諸課題の解決に向けダルマの意義と貢献の可能性の論究および提言等に取り組み、もって世界の平和と安穏のために寄与することを目的とする」と定められている。

（2）中村元『中村元の仏教入門』春秋社、二〇一四年、5頁。「仏教という用語の使用例は新しい」という点について、中村元氏は次のように述べている。「現代インドでは、仏教を意味して『バウッダ・ダルマ Bauddha-dharma』といい、スリランカでは『ブッダ・ダンマ Buddha-dhamma』あるいは『ブッダ・サーサナ

Buddha-sāsana』という呼称を用いるが、これらの場合には、外から入ってきた諸宗教に対立する宗教、という自覚が強くはたらいている。（中略）『仏教』なる用語の使用例は存外に新しく、明治期の日本が欧米『近代』の移入を図った時と軌を一にする。そして、やはり同時期、同様にして『哲学』が新しく造語され、『仏教』、『宗教』の語も本来的意味を改変されて、すでに日常語化して現在に至っているが、それらは必ずしも本源的な概念を包括するものではなく、また表現しきっているものでもない。昔は『仏法』という語で称していたが、『仏教』としたところに、すでに西洋的思惟による変容がなされているのである。むしろ、これらの基本的かつ抽象的語彙が日常語化したことによって誤解が増幅され、伝達されていく危険すらはらむ。その典型が『宗教』であり、『仏教』の語であるように思われる」（中村元・三枝充悳『バウッダ・仏教』小学館、一九九六年、14～15頁。）

ただし、「仏教」という語は、「ブッダの言葉」「ブッダの教え」という意味で漢訳仏典に頻出することも注意されなければならない。

（3）同上、5～6頁及び69～70頁参照。「ダルマ」についての詳しい考察は、中村元『原始仏典を読む』岩波書店、一九八五年、１９７～２１７頁。

（4）中村元訳『ブッダのことば―スッタニパータ』岩波書店、一九八四年、４３３頁。

（5）同上、22頁参照。原文では「貪欲と嫌悪と迷妄とを捨て、結び目を破り、命を失うのを恐れることなく、犀の角のようにただ独り歩め」となっている。

（6）玉城康四郎『悟りと解脱』法蔵館、二〇二一年、17頁参照。
（7）同上、11頁・18頁参照。
（8）同上、21頁参照。
（9）同上、31頁。
（10）同上、32頁参照。
（11）同上、32頁。
（12）同上、13頁・32頁。
（13）中村元『佛教語大辞典』東京書籍、一九七五年、上巻２７８～２７９頁。
（14）福岡伸一『生物と無生物のあいだ』講談社、二〇〇七年、１６４頁。
（15）ここでは、三枝充悳『縁起の思想』（法蔵館、二〇〇〇年）83頁の訳文に依ったが、中村元訳『ブッダの真理のことば　感興のことば』（岩波書店、一九七八年）49頁では、「一切の形成されたものは無常である（諸行無常）と明らかな智慧をもって観（み）るときに、ひとは苦しみから遠ざかり離れる。これこそ人が清らかになる道である」と訳されている。
（16）平川彰「第二章　初期仏教の倫理」（『講座東洋思想5』、仏教思想Ⅰ インド的展開、東京大学出版会、一九六七年）、56～58頁参照。
（17）同上、50頁参照。
（18）梶山雄一『「さとり」と「廻向」』講談社、一九八三年、18～19頁。

(19) 柳澤桂子『生きて死ぬ智慧』小学館、二〇〇四年、7頁参照。
(20) 前掲『佛教語大辞典』上巻、118頁参照。
(21) 桂紹隆・五島清隆『龍樹『根本中頌』を読む』春秋社、二〇一六年、96頁。
(22) 同上、179～180頁。
(23) 中村元『般若経典（現代語訳 大乗仏典1）』東京書籍、二〇〇三年、44頁参照。
(24) 前掲『佛教語大辞典』上巻、118頁・278～279頁参照。
(25) 中村元『空の論理』（中村元選集［決定版］第22巻） 春秋社、一九九四年、258～266頁参照。
(26) 前掲『「さとり」と「廻向」』19頁。梶山雄一氏の原文では「空の思想は必然的に不二の思想に導いてゆく」となっている。それを本稿では、「空は必然的に不二の真実に導きます」と書いている。中村元氏は本稿でも引用している通り、空について、「高い境地からみると、ただ偉大なる一つのことわりがあるだけで、生じても滅してもいません。（中略）ただ偉大なる真実が、そこにあるだけです」と説明されている。従って究極の境地である空は、ただ真実があるだけの、日常の対象的思考を超えた絶対の境地であるから、「空の思想」とか「不二の思想」というより、「空は必然的に不二の真実に導きます」と書く方がより分別臭の少ない表現になるのではないかと愚考した。玉城康四郎氏もダンマについて「全人格体が粉砕された、その当体をダンマと名づけたのであるから、意味も思想も超えた語

であり、ブッダの教えに従って通達してみれば、形なきいのちというほかに表わしようがない（前掲『悟りと解脱』31～32頁参照）」と解説されている。

(27) 前掲『般若経典』48頁参照。

(28) 玉城康四郎『現代語訳 正法眼蔵（六）』大蔵出版、一九九四年、３９１頁。

(29) 大久保道舟編『道元禅師全集』下巻、筑摩書房、一九七〇年、４１１頁。

(30) 前掲『般若経典』１３５頁参照。

(31) 東京大学仏教青年会編『新装版 現代仏教聖典』大法輪閣、二〇一六年、２３４頁参照。

(32) 前掲『般若経典』62頁・86頁参照。

(33) 同上、２１０頁参照。

(34) 同上、38～39頁参照。

(35)『浄土真宗聖典　註釈版第二版』本願寺出版社、二〇〇四年、５７１頁「浄土和讃」。

(36) 同上、６７８頁「一念多念文意」。

(37) 同上、８３２頁参照。

(38) 前掲『般若経典』39頁・62頁参照。

(39) 前掲『般若経典』１３６頁。

(40) 前掲『浄土真宗聖典』７６９頁「自然法爾の事」参照。

(41) 前掲『浄土真宗聖典』591頁「高僧和讃　善導讃」。
(42) 前掲『悟りと解脱』69～70頁参照。引用した箇所について、中村元氏は次のように訳されている。「わたくしのさとったこの真理は深遠で、見がたく、難解であり、しずまり、絶妙であり、思考の域（分別の領域）を超え、微妙であり、賢者のみよく知るところである。ところがこの世の人々は執著のこだわり（アーラヤ）を楽しみ、執著のこだわりに耽り、執著のこだわりを嬉しがっている。さて執著のこだわりを楽しみ、執著のこだわりに耽り、執著のこだわりを嬉しがっている人々には、＜これを条件としてかれがあるということ＞すなわち縁起という道理は見がたい。……すべての執著を捨て去ること、妄執の消滅、貪欲を離れること、止滅、やすらぎ（ニルヴァーナ）というこの道理もまた見がたい。」（中村元選集［決定版］第11巻『ゴータマ・ブッダⅠ』春秋社、一九九二年、443～444頁）。
(43) 前掲『ゴータマ・ブッダⅠ』445頁。
(44) 前掲『悟りと解脱』69～70頁参照。
(45) オバマ大統領の広島演説、二〇一六年五月二十七日。翌日の朝日・読売新聞など朝刊。産経新聞には全文が掲載されている。
(46) 拙著『仏教と社会的実践の研究』（世界聖典刊行協会、一九八八年）中、第四編「核時代におけるカトリックの平和観」において、第六章で核抑止力について詳述している。ローマ教皇も核抑止の現実の危険性に言及している。

（47）太田昌克・兼原信克・髙見澤將林・番匠幸一郎『核兵器について、本音で話そう』新潮社、２０２２年、１７３～１７４頁。

（48）My own nation's story began with simple words:“All men are created equal, and endowed by our Creator with certain unalienable rights, including life, liberty and the pursuit of happiness.”
『アメリカ古典文庫16アメリカ革命』（研究社出版、一九七八年、１３９～１４０頁）では、この箇所は「すべて人間は平等につくられている。すべての人間は創造主によって、誰にも譲ることのできない一定の権利を与えられている。これらの権利の中には、生命、自由、そして幸福の追求が含まれる」と訳されている。森島豊氏は『抵抗権と人権の思想史』（教文館、二〇二〇年、55～56頁）において、「アメリカ独立宣言」と「ペンシルヴァニア州憲法」を引用し、次のように述べている。「上記の宣言と憲法では、聖書の天地創造で語られる神を根拠に人権を主張している。具体的に言えば、聖書が語る神につくられた人間の本来的あり方を根拠として、それに反した強制力に抵抗する権利を主張した」

（49）国際連合広報センター（UNIC）のホームページ「世界人権宣言テキスト」の前文。

（50）Unconditional and effective respect for each one's unprescriptable and inalienable rights is the necessary condition in order that peace may reign in a society.（The

Challenge of Peace: God's Promise and Our Response, A Pastoral Letter on War and Peace, May 3,1983, National Conference of Catholic Bishops, Publication No.863, United States Catholic Conference, Washington, D.C. 20005, p.22)

（51）前掲論文「核時代におけるカトリックの平和観」第六章を参照されたい。

（52）In current conditions "deterrence" based on balance, certainly not as an end in itself but as a step on the way toward a progressive disarmament, may still be judged morally acceptable. Nonetheless in order to ensure peace, it is indispensable not to be satisfied with this minimum which is always susceptible to the real danger of explosion.（前掲　The Challenge of Peace, p.54）

（53）鈴木大拙『東洋的な見方』角川文庫、二〇一七年、7頁。

（54）同上、11頁。

（55）前掲『浄土真宗聖典 註釈版第二版』73頁「仏説無量寿経」参照。

（56）前掲『ブッダの真理のことば 感興のことば』10頁。

（57）中西輝政「第三次世界大戦の発火点」（『文藝春秋』二〇二二年五月特別号所収、１４２頁。）

（58）（59）国際連合広報センター（UNIC）のホームページ「国連憲章テキスト」前文及び第二条四項。

（60）この点に関連してプーチン大統領は、五月九日の対ドイツ戦勝記念日でも、

祖国の未来と世界からナチスらの居場所をなくすために戦っていると主張するとともに、「（ウクライナに）軍事施設がつくられ、ＮＡＴＯ諸国が最新兵器を供給して危険が増していた」と演説、「やむを得ない、唯一の正しい決断だった」と侵攻を正当化している。これに対しウクライナ大統領府はSNSで、「ＮＡＴＯはロシアに侵攻しようとしていなかったし、ウクライナもクリミア半島への攻撃を計画していなかった」と反論した。（『朝日新聞』二〇二二年五月十日付朝刊）。

（61）The Russian invasion has completely destroyed the trust of the international community in entrusting this legitimacy to the Permanent Five for enforcing the collective security system under the Charter. This destruction of the trust of the international community is to my mind the most serious permanent damage done to the innovative system of governance created under the Charter.
小和田恒氏スピーチ、ライデン大学 小和田記念講座 2022.05.24
https://www.universiteitleiden.nl/binaries/content/assets/algemeen/orraties/speech-of-the-owada-memorial-chair.pdf （参照 2022-06-06）

（62）『産経新聞』二〇二二年三月十三日付「主張」。

（63）佐藤優「世界裏舞台」（『産経新聞』二〇二二年四月十日付、所収）。

（64）同上、寄稿、五月八日付。なお、ウクライナ侵攻開始から三カ月を迎える五月二十五日付朝刊で『朝日新聞』は、「ロシアでプーチン政権の支持基盤に異変が

見え始めた」として、外交官の抗議辞職、プーチン氏の盟友の苦言、国営テレビ番組における司会者の嘆きや退役大佐で軍事評論家の「ウクライナ軍は士気が高く…全世界が我々に敵対している」などの発言を報道している。

米政府は五月三十一日、ウクライナ軍に新たな高性能ロケットシステムを提供すると表明したが、事態の激化を避けるためロシア領内への攻撃には使わない条件をつけた。そしてバイデン米大統領は同日の米ニューヨーク・タイムズ紙への寄稿で、ウクライナ戦争への米国の関与のあり方について、次の諸点を明らかにした。

「米国の目標は、ウクライナがさらなる侵略を抑止・自衛する手段を持つこと。この戦争は外交を通じてのみ終結する。交渉の席でウクライナが有利になるよう大量の兵器を提供してきた。米国はプーチン氏をモスクワから追放しようとはしない。ロシアに苦痛を与えるためだけに戦争を長引かせることはしない。ウクライナ政府に領土の譲歩を迫ることはしない。いかなる核兵器の使用も容認できず、深刻な結果をもたらす。」（『朝日新聞』六月二日付朝刊）

ウクライナ情勢に関する情報は、「註」を付けたもの以外は、読売・朝日・産経新聞等の記事によった。

このブッダ・ダルマ作品集に掲載しました石上智康氏の≪ブッダ・ダルマ覚え書≫等の作品は、以下の２つのＷｅｂサイトからも閲覧することができます。

ブッダ・ダルマの意義と貢献の可能性を広く世界に発信するために、日本語だけでなく英語版でも御覧いただけます。

カンファ・ツリー・ヴィレッジ専用サイトのニュースページ
https://camphortreevillage.com/news/

学校法人武蔵野大学 １００周年記念サイト
https://100th.musashino-u.ac.jp/